

# 戦争遺跡と資料館による記憶の伝承

## ～九州の取組と問題点

藤井 学

### はじめに

2015年8月15日、わが国が第2次世界大戦に敗北した「終戦の日」から70年が経過する。この70年間わが国は、多くの国民を巻き込む形での戦争を体験することはなかった。このことは、政府や国民の尽力に加え、帰還兵や海外からの引き揚げ者、空襲被災者などの戦争体験者が、戦争の悲惨さや平和の尊さを多くの人々に語り伝えたことが影響している。しかし同時に、この70年間で彼ら彼女らの多くはこの世を去った。体験者による戦争の記憶の伝承は、やがて継続できなくなる時を迎える。

一方、明治維新以来、富国強兵策を進めてきたわが国は、様々な形で戦争に関わってきたが、その名残はなお存在している。分かりやすいものとしては、戦争に関わる遺構や軍事施設、防空壕、戦争で被災した建造物などである。細かい定義は諸説あるが、明治維新以後から第2次世界大戦終了に至る期間に設置されたこれらの名残は、一般的には「戦争遺跡」<sup>1)</sup>と呼ばれる。戦争遺跡は、今なお国内各地および九州・山口で散見される。また、官民間問わず戦争遺跡の近くに資料館などの見学施設が開館され、遺族の遺品集めや体験者の証言の記録化、戦争遺跡に関する資料の発掘など、体験を語ること以外で戦争の記憶の伝承を進める様々な動きが徐々に進んでいる。戦争の記憶の伝承は、体験者という「ヒト」から、地域と連携する形で戦争遺跡や記念館といった「トコロ・モノ」へと移行しつつあるといえる。

本稿では、九州内の3カ所（陸軍大刀洗飛行場、宇佐海軍航空隊、海軍鹿屋航空基地）を事例として、戦争遺跡と資料館などによる戦争経験の伝え方や地域との関係について紹介する。そして、今後の戦争遺跡と資料館による戦争の記憶の伝承におけ

る問題点を明らかにする。

### 1. 九州・山口の主な戦争遺跡と資料館

2002年に報告された文化庁の「近代遺跡の所在調査一覧」によると、戦争遺跡は43都道府県に544カ所存在する。同年8月に同庁は「近代遺跡の調査等に関する検討会」を開催し、544カ所のうち50カ所を詳細調査が必要な戦争遺跡として選択した。そして、この50カ所を対象に現在に至るまで調査を進めている<sup>2)</sup>。なお、選択された50カ所の戦争遺跡のうち、九州・山口には13カ所ある。

文化庁が選択した13カ所以外にも、九州・山口には様々な戦争遺跡が残っている（図1）。第2次世界大戦中、九州・山口には旧陸軍航空隊・旧海軍航空隊の訓練基地、および特別攻撃隊（振武隊など）や神風特別攻撃隊<sup>3)</sup>に関する基地が数多く展開していた。そのため、九州・山口の戦争遺跡は、築城海軍航空隊基地や陸軍大刀洗飛行場とった、航空基地・飛行場跡地が多い。この他、古い遺跡としては西南戦争関係の遺跡や砲台・台場がある。また、地上戦が行われた沖縄には、司令部や病院などで活用された壕が数多く残っている。

また、九州・山口には、様々な主体による資料館・史料館・記念館・ミュージアム（本稿では特に断り書きがない限り「資料館」と表記）が展開している。場所は、戦争遺跡の近くが多い。

戦争遺跡として分類される対象、また資料館で取り扱うテーマや視点は多種多様であり、そこから伝えられる内容やその方法も様々である。次章以降では、九州・山口で数多く展開された航空基地・飛行場跡地を対象を絞り、その成り立ちと現在に至る経緯を紹介しつつ、戦争体験の伝え方や地域との関係について紹介する。

1) 本稿では、基本的に「戦争遺跡」の用語を使うが、土地と一体化して動かすことができないものについては、必要に応じて「戦争遺構」「遺構」を使う

2) 調査は現在も継続中であり、結果は報告書にまとめて公表の予定

3) 特別攻撃隊（振武隊など）は旧陸軍の航空機による体当たり攻撃、神風特別攻撃隊は旧海軍の航空機による体当たり攻撃を指す。両者は厳密に区分されているが、これ以降本稿では、旧日本軍の航空機による体当たり攻撃を特攻隊（特攻機、特攻基地など）と称する